

国際日本 研究センター

International Center
for Japanese Studies

NEWS LETTER ニューズレター

東京外国語大学
Tokyo University of Foreign Studies
<http://www.tufs.ac.jp/common/icjs>

2014.5 No.

14

・国際ワークショップ「民衆の記憶と東アジアの民主主義—サバルタンの声を聴くこと」開催 International Workshop "Listening to the Voices of Subaltern: People's Memory and the Democracy in East Asia"	P1
・特任研究員ワークショップ報告 Report: ICJS Joint Researchers Workshop	P1 ~ 2
・公開研究会「紐帯としての日本語〜」開催 Open Seminar "Japanese Language as a Bond ~" Report	P2
・「外国語と日本語との対照言語学的研究」第12回研究会 "Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 12th Research Seminar	P2 ~ 3
・講演会「聖書の日本語 翻訳の歴史」報告 Lecture Report: "Japanese in the Bible - the History of Translation"	P3
・ワークショップ「イベリアの帝國的拡大とアジア」開催 Workshop Report: 'Imperial Expansion of Iberia and Asia'	P3
・2013・2014年度 活動報告(2014年3月〜5月) Activity Report (Mar - May.2014.)	P4

国際ワークショップ「民衆の記憶と東アジアの民主主義—サバルタンの声を聴くこと」開催 International Workshop "Listening to the Voices of Subaltern: People's Memory and the Democracy in East Asia"



ワークショップに参加した本センター特任研究員の曹恩美さんに寄稿をお願いしました。

2月20日、国際ワークショップ「民衆の記憶と東アジアの民主主義—サバルタンの声を聴くこと」が海外事情研究所との共催で開催された。中野敏男氏(本学)を司会に、金元氏(韓国学中央研究院)の基調講演、そして友常勉(本学)、戸邊秀明(東京経済大学)、李英哲(朝鮮大学校)、金閔愛(本学博士後期課程)の各氏がパネリストとして参加した。

1980年5月26日、韓国光州市で、チェ・ドッチュン一家3人が殺害される事件が起きた。当時の記録によると、犯人は長男チェ・ Cholであり、その殺害動機は家族の間における怨恨であるという。

金元氏らの研究グループは「この事件は本当に怨恨による殺人なのか」という疑問から出発して、1980年の光州事件(5.18)当时に起きた殺人事件についての手掛かりを「時間」にそって追跡してきた。金元氏らは、莞島と光州の現地調査と、口述資料収集をかさねるうちに、その場所で出会った人々の沈黙と(資料との)「ズレ」が現在進行形として存在していること、冷戦という東アジアの時

間帯と「通時的に」重なっていたことを明らかにしながら、とくにチェ・ドッチュンの生涯を追いながら、植民地経験、冷戦と内戦と虐殺、生存など1920年代に生まれた人々の韓国現代史における「見慣れた生涯史」を見いだす。

金元氏らの研究は5.18と莞島での内戦の過程を手掛かりとして、20年代生まれの経験を追跡するうちに、当事者である彼らは自分の声を持ってない民衆であったこと、いわば埋没させられていた存在が「今ここに」、いることをチェ・ドッチュンの生涯を描くことを通じてわれわれに像を結ばせてくれた。

金元氏らの研究は声を出せない民衆の記憶を再現しようとしながら、最後に「韓国という「一国史」という境界を越えて、『沈黙する民衆』の交差する声を再現」しなければならないと訴えかけることで締めくくっている。

ワークショップには40数名の多彩な参加者があり、各パネリストからも示唆に富むコメントがなされ、活発で充実した質疑応答が行われた。



This report was contributed by one of the participants, Ms. CHO, Eunmi, the Special Researcher, ICJS.

On February 20th, an international workshop co-hosted by the Institute for Japanese Studies, entitled "Listening to the Voices of Subaltern: People's Memory and Democracy in East Asia", was held at the Institute of Foreign Affairs. Speaker Mr. Kim Won used the Gwangju incident and Wando civil war as starting points to explore the Cold War, the Korean War, Wando and 1980's Gwangju. In tracing the places and times of these events, he made clear how those who experienced them are voiceless – in other words, a hidden presence in the here and now. Mr Kim Won and the other speakers tried to recreate the memories of these voiceless people. The workshop closed with an enunciation of the necessity of "recreating the criss-cross of voices of those silenced, in Korea and beyond".

特任研究員ワークショップ報告 2014年3月4日(火) Report: ICJS Joint Researchers Workshop



公益財団法人博報堂児童教育振興会「第8回日本語海外研究者招聘事業」招聘研究者兼当センター特任研究員であるファム・ホアン・フン氏(ベトナム国立大学ハノイ校人文社会科学大学東洋学部日本学科講師)による研究発表をワークショップとして研究講義棟104教室にて開催した。

テーマは「日本幕末・明治初期における和製漢語と現代ベトナム語への影響」。明治初期の和製漢語が中国、朝鮮半島などにも「輸出」され、現在も使われているという事実は広く知られているが、ベトナム語にも取り入れられており、それは、ベトナムの近代化に一定の役割を果たしたこと、また、現在も引き続き使われていることは、あまり知られていない。ファム氏は、現代ベトナム語にも残る和製漢語約800語を抽出し、現代ベトナム語への影響について考察した。明治初期に導入された和製漢語は現在では、語順の変換、一部のベトナム語への置換などベトナム語化が進んでいるが、依然として使われている。また、導入された和製漢語は特に政治、哲学系の語が多いという事実から、20世紀初頭のベトナム近代化の中での日本との交流、日本の果たした役割との関連を見て取ることができる。ファム

語にも取り入れられており、それは、ベトナムの近代化に一定の役割を果たしたこと、また、現在も引き続き使われていることは、あまり知られていない。ファム氏は、現代ベトナム語にも残る和製漢語約800語を抽出し、現代ベトナム語への影響について考察した。明治初期に導入された和製漢語は現在では、語順の変換、一部のベトナム語への置換などベトナム語化が進んでいるが、依然として使われている。また、導入された和製漢語は特に政治、哲学系の語が多いという事実から、20世紀初頭のベトナム近代化の中での日本との交流、日本の果たした役割との関連を見て取ることができる。ファム

ム氏は言語ではなく、歴史を専門としているが、言語を手がかりに歴史研究を行っている点が意義深く、専門領域を架橋する取り組みであるといえる。当日は30名あまりの聴衆が参加し、発表後は質疑応答が行われた。同様の立場にある朝鮮半島の事情について朝鮮語

研究者からもコメントがあり、歴史、言語など複数の分野、複数の地域を専門とする研究者による活発な議論が交わされた。多くの人に刺激を与える発表であった。(坂本恵)



"The 8th Foreign Researchers of Japanese Project", a Hakuho Foundation workshop jointly held by ICJS and guest researchers
Speaker: PHAM Hoang Hung (lecturer, Department of Japanese Studies, Faculty of Oriental Studies, University of Social Sciences and Humanities, Vietnam National University)
Tuesday 4th March 2014, 17.00-18.30. Room 104, Research and Lecture Building

Theme: "The New Kanji from the late Edo to the early Meiji Period and their impact on modern Vietnamese"

It is not widely known that the kanji compounds created in Japan in the early Meiji period were introduced into Vietnam as well as into China and Korea, nor that these compound words played a part in Vietnam's modernization and still exist in modern Vietnamese. Pham Hoang Hung selected approximately 800 of these kanji compounds and examined their modern-day influence. A specialist in history, his cross-disciplinary work is remarkable for using language as a basis for historical research. Over thirty people attended his presentation, including researchers from a variety of fields including history and linguistics who contributed to a lively discussion. (Megumi Sakamoto)

公開研究会「紐帯としての日本語～」開催 2014年3月7日(金) Open Seminar "Japanese Language as a Bond ~" Report Fri. 7 Mar., 2014



3月7日、科研費「**紐帯としての日本語**」日本人社会、日系コミュニティ、「日本語人」の生活言語誌研究(研究代表・野本京子)主催による公開研究会「紐帯としての日本語～「日本」を離れた日本語と日本語コミュニティ」が開催された。

講演者はこの科研の研究協力者としてブラジルでの調査に携わってきたキタハラ高野聡美氏(リオデジャネイロ州立大学)、コメンテーターはましこ・ひでのり氏(中京大学)。キタハラ氏の講演タイトルは「ある家族の海を渡った記録: 日本語・日本文化継承状況と家族史共有の米伯比較」。1918年に福岡県から米国に渡航した長男・北原敬弘氏、1924年にブラジルに渡った次男・北原文蔵氏を先途として、北原=キタハラファミリーの米・伯での移民史が始まった。キタハラ高野聡美氏はこの移民の家族史聞き取りを、米国(15家族)、ブラジル(112家族)を対象に進めてきた。そうした調査をふまえて、この家族史を横軸に、日本文化の継承状況、アイデンティ

ティとスティグマ、異なるエスニシティ間の結婚増加などのセンサスも含むデータを縦軸として説明された。その結論は以下の通りである。「移住の仕方が日本語、日本文化、家族史伝承の鍵になっていること」「移住第一世代の兄弟関係が二世代めにも継承されていること」「日本語が継承語として機能するためには、使用者、または対話者どうしがシークレットコードと感ずるレベルである必要がある」「文化コードも二世代めから、ローカル(同化)主義的な者、日本志向の者、グローバル志向の者に分かれ、三世代めからはグローバル志向が主流になっていく。これは日本、米国、ブラジルの国際的な立ち位置と日本語、英語、ポルトガル語の位置と密接に関連しており、切り離せない」膨大な家族の生データを紹介しながらの圧巻の報告であった。移民の言語選択や志向性が言語の市場での価値と関わっていることに言及したコメンテーターのましこ・ひでのり氏の問題提起も時宜にかなったものであった。20名程度の参加者であったが、海外での日本語教育の経験の報告もあり、有意義な会となった。(友常勉)

Open Seminar on "Japanese Language as a Bond: Japanese language and Japanese communities abroad," hosted by Grants-in-aid for Scientific Research, co-hosted by ICJS
Lecturer: Prof. Kitahara, Takano, Rio de Janeiro State University, Brazil. Commentator: Prof. Mashiko, Hidenori, Chukyo University, Japan.

Prof. Kitahara's lecture investigated the family history of the Kitaharas, who emigrated to the US and Brazil from Japan during the early 20th century. Prof. Kitahara made some remarkable observations. 1) The method of immigration determined how the knowledge of Japanese language, Japanese culture and family experiences were passed on to the next generation. 2) Sibling relationships in first generation immigrants are inherited by the second generation. 3) In order to preserve and pass on language, it is necessary to develop it to the level of a 'secret code' shared by speakers. The same is true for culture. 4) By the second generation, family members showed three different tendencies: assimilation oriented, Japan oriented and global oriented. 5) From the third generation, family members mainly adopt a global outlook in their identity formation. This is closely linked to the positioning in the international hierarchy of Japan, the US and Brazil, as well as the hierarchical positioning of Japanese, English and Portuguese. (Tsumotomo Tomotsune)



『外国語と日本語との対照言語学的研究』第12回研究会 "Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 12th Research Seminar

日時: 2014年3月8日(土) 13:50 ~ 17:20
 場所: 東京外国語大学 語学研究所(研究講義棟4階419号室)
 発表者・講演者と題目

黒澤直俊氏(東京外国語大学) 研究発表「ポルトガル語・アストゥリアス語・スペイン語 — 隣接言語の諸相」
 野元裕樹氏(東京外国語大学) 研究発表「マレー語の再帰表現: 自分, 自身, 自分自身」
 黒田龍之助氏(フリーランス語学教師) 講演「辞書の作り方～ベラルーシ語＝日本語学習辞典編纂の試み～」



黒澤氏は、スペイン北部のアストゥリアス自治州を中心に話されているアストゥリアス語の概説をした。この地域では14世紀以降スペイン語化が進んだが、1975年に再生運動が始まり、現在は保護対象言語とされる。1981年以降アカデミアにより正字法規範、文法、辞典が刊行され、秀逸な文学作品も数多い。言語状況の概観に続き、音声面での特徴、形態論(例:形容詞にも中性形が存在)、統語論(例:目的語代名詞の位置)、意味論(例:時制システム)、語彙論の観点から、隣接言語と対比しつつ要点を紹介した。

野元氏は、まず、マレー語の再帰形とみなされる形式「diri+代名



詞」が日本語の「自分」と同様に、長距離照応を許しつつも人称の異なる名詞句の介在による阻止効果が観察されないこと、そしてそれは同形式の特殊性によることを紹介した。先行研究では、同形式全体を単一の語彙項目とし、照応に関する性質を表現全体に固有の性質と分析するが、野元氏は、各構成要素の意味を構成的に分析することを提案し、それにより、同形式のみならず、先行研究では考慮されていない種々の再帰に関わる形式の特性も体系的に捉えられることを示した。

黒田氏は、本邦初の「ベラルーシ語＝日本語辞典」編纂の舞台裏を、ユーモアを交えて紹介した。ロシア語と極めて近い言語であり、初級者向けの本辞典もロシア語文法の知識を前提とする。学習辞典なので、語数増加より、変化形、例文、関連語彙などの充実やレイアウトも重要だと言う。頻度数辞典、ポーランド語やロシア語との二言語辞典などを精査して見出し語を選択し、例文収集には会話集や練習問題集なども参照する。採用する正書法、見出し語とする体、語義がロシア語と微妙にずれるケースの判断など、クリアする問題は多いと言う。1990年代のミンスクを例にベラルーシの言語状況の紹介もあり、ベラルーシ語学習を通してスラブ語学の視野が

拡がるとの見解も示した。「対訳辞典は究極の対照言語学ではないか？」という問いで講演を締めくくった。(成田節)

7 Mar., 2014 Lecturers: Ryunosuke KURODA, Slavacist, Freelance Language Expert; Naotoshi KUROSAWA, Hiroki NOMOTO, Tufs, Japanan.

Mr. Kurosawa outlined the general grammatical characteristics and sounds of Asturian, a protected language spoken mainly in the autonomous community of Asturias in northern Spain, contrasting it with related languages.

Mr. Nomoto identified the characteristics of the Malaysian reflexive structure "diri + pronoun". Rather than seeing this structure as simply an item of vocabulary, he demonstrated how structural analysis of the meaning of each component in the phrase, made possible a systematic view of Malaysian's various reflexive forms.

Mr. Kuroda gave an entertaining introduction to the editing of the first Belarusian-Japanese dictionary. He revealed techniques used to create learners' dictionaries, methods of selecting headwords and collecting example sentences and issues that need resolving during editing, also hinting at links with contrastive linguistics. (Takahashi Narita)



講演会「聖書の日本語 翻訳の歴史」報告 2014 年3月18日(火) Lecture Report: "Japanese in the Bible – the History of Translation" 18 March 2014



2014年3月18日(火)、比較日本文化部門と国際連携推進部門の共同開催で、立教大学名誉教授・鈴木範久氏による講演会「聖書の日本語 翻訳の歴史」が開催された。鈴木範久氏は、近代日本のキリスト教の歴史を中心とする宗教史を専門とされ、日本の宗教史、キリスト教史(とりわけ内村鑑三)に関する著作を多数発表している。今回の講演タイトルは、2006年に岩波書店から出版された鈴木氏の著作『聖書の日本語 翻訳の歴史』をそのまま用いている。

鈴木氏の著作には、聖書の日本語翻訳の歴史を通じて日本のキリスト教史を描き出すという目的とともに、聖書の翻訳を通じて、近代の日本語がどのように形成されてきたかを示すというもう一つの重要な側面もある。この講演会はもともと、これら二つの論点のうち、おもに後者の関心から企画されたものだった。さらにいえば、漢字文化圏においてそれぞれの国の近代化の過程で欧米の概念が翻訳語として取り入れられていくとき、それらの翻訳語

が相互にどのような関係にあったのかというのが、われわれの根本的な関心である。鈴木氏の著書、そしてそれに基づいた今回の講演からは、聖書翻訳の歴史が漢字文化圏(とりわけ中国及び日本)において、翻訳語全般の形成において決定的な役割を担っていること、そしてまた各国の翻訳語が相互にきわめて密接な影響関係をもっているという歴史的プロセスをありありと感じることができた。また、翻訳語をめぐる問題は、単にどのような語が歴史的過程において選択されてゆくかという問題だけでなく、それぞれの伝統的な文化の問題を明確に浮かび上がらせるものでもある(例えば、「神」、「愛」、「隣人」といった具体的な言葉に即して話が進められた)。講演後の質疑応答では、宣教の歴史におけるプロテスタントとカトリックの立場や、19世紀後半以降の中国におけるイギリスとアメリカの宣教師の立場の違いなど、きわめて興味深い論点も提出された。聴衆は約35名程度だったが、参加者のそれぞれが宣教の歴史と日本語の形成について大きな関心を抱くことができる講演会となった。(山口裕之)

Lecturer: Norihiko SUZUKI, Professor Emeritus at Rikkyo University. At an event co-hosted by the Comparative Japanese Culture and International Cooperation Divisions, Professor Suzuki used the example of Bible translation to present the process by which modern Japanese has developed. At the request of the International Center for Japanese Studies, Professor Suzuki focused on the interrelationships between the translations of Western concepts into different East Asian languages, as these terms became adopted as part of the process of modernisation in the Sinosphere. Professor Suzuki elucidated the decisive role played by the history of Bible translation in the development of translation as a whole within the Chinese cultural sphere, particularly in China and Japan. The lecture also revealed the historically close interrelationship between translated terms in each country. (Hiroyuki YAMAGUCHI)



ワークショップ「イベリアの帝國的拡大とアジア」開催 2014 年4月13日 Workshop Report: 'Imperial Expansion of Iberia and Asia'



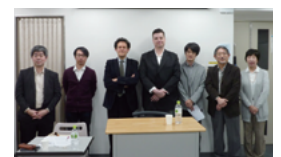
本会で通訳を担当された竹下和亮氏(国際基督教大学アジア文化研究所準研究員)に寄稿をお願いしました。

2014年4月13日、本学の日西交流400周年実行委員会と国際日本研究センターの主催によるワークショップ「イベリアの帝國的拡大とアジア」(共催:スペイン史学会)が、本郷サテライトで行われた。基調報告を行ったジャン＝フレデリック・ショーブ氏(フランス社会科学高等研究院)はスペインとポルトガルの近世史が専門であるが、これまでつねに比較史や世界史の視点を失わず斬新でダイナミックな研究をしてきた。時代と空間の広域的な全体像を描くショーブ氏の魅力は、今回もいかに発揮されたように思う。

基調報告のテーマは、近代ヨーロッパの海洋進出と人種主義の淵源を中世にさかのぼって検討することである。そこで研究史を整理しつつ、中世の十字軍やレコンキスタ、地中海と大西洋の奴隷貿易、ユダヤ人の迫害、異端審問などの主要な論点に即して中世

と近代とのつながりが紹介された。その意味では、一貫して時代の連続に力点を置いた議論だったといえる。だが注目すべきは、同時に近世ヨーロッパの大西洋経験によって新しい時代が開かれたとも述べられたことである。おそらく連続と断絶の双方をみすえようとしてのことであろう。コメントの労をとられたホムロ・エハルト氏(東京外国語大学大学院)と伊川健二氏(成城大学)は、それぞれブラジル史と日本史の観点から、基調報告をアメリカとアジアにつなぐ論点を提出され、議論はより豊かで深まりのあるものとなった。

このような幅の広い議論に対しては、個々の点では当然反論があろうし、時間が許せばショーブ氏もそれを歓迎されたに違いない。しかし、新たな時代区分の提示が歴史家にとって挑戦的課題となっているいま、ヨーロッパ史そのものの時代区分を、その他の世界との関係というパースペクティブで再構築しようとしているショーブ氏のご報告は、様々な地域の研究者にとって、参照系としての役割を充分果たすことになるに違いない。



This report was contributed by the interpreter at of this Workshop, Dr. Kazuaki TAKESHITA, Research Associates, Institute of Asian Cultural Studies, International Christian University. Sunday, April 13, Lecturer: Jean-Frédéric Schaub, EHESS (Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales), hosted by Sociedad Japonesa de Historia de Espana, co-hosted by ICJS.

In the key note speech, Prof. Schaub examined the marine expansion of modern Europe and the origins of racism, by tracing back to the medieval period. Through considering previous works events such as the medieval Crusades, the Reconquista, the slave trade in the Mediterranean Sea and the Atlantic Ocean, the persecution against of Jews and , the Inquisition, he demonstrated the relationship between the medieval and modern times and the modern. In this sense, his lecture stressed the continuation of history. Nonetheless, it is remarkable that he also notably referred to the fact that the new period was opened by the modern Europe's experience in the Atlantic Ocean opened a new age. The discussion was deepened and enriched by. With impressive comments to from the lecture by Romulo Ehalt, Tufs, Brazilian history, and Igawa Kenji, Seijo University, from the standpoints of Brazilian and Japanese history, the argument was deepened and affluently developed respectively.

2013・2014年度 活動報告(2014年3月～5月)

Activity Report (Mar - May.2014)

■講演会・ワークショップ等■

- 3月4日(火)国際日本研究センター主催 特任研究員※ワークショップ「日本幕末・明治初期における和製漢語と現代ベトナム語への影響」
ファム ホアン フン氏(ベトナム国立大学ハノイ校人文社会科学大学)
- 3月7日(金)社会言語部門主催、科学研究費(基盤B No. 23310176 代表: 野本京子)共催(紐帯としての日本語)「日本を離れた日本語と日本語コミュニティ」
キタハラ高野聡美氏(リオデジャネイロ州立大学)、ましこ・ひでのり氏氏(中京大学)
- 3月8日(土) 対照日本語部門主催『外国語と日本語との対照言語学的研究』第12回研究会
黒田龍之助氏(フリーランス語学教師・スラブ語学)、黒澤直俊氏、野元裕樹氏(東京外国語大学)
- 3月18日(火)比較日本文化部門・国際連携推進部門共催 研究会『「聖書の日本語」翻訳の歴史」
鈴木範久氏(立教大学名誉教授)
- 4月13日(日)東京外国語大学日西交流400周年実行委員会、東京外国語大学国際日本研究センター主催ワークショップ「イベリアの帝國的拡大とアジア」
ジャン・フレデリック・ショープ氏(フランス社会科学高等研究院教授)

■会議歴■

- センター会議: 2014年 3月6日、4月10日、5月15日
- 部門会議: 2014年 4月24日、30日、5月8日

■ Lectures and Workshops ■

- 4 Mar.: The 3rd ICJS Joint Researchers Workshop "The New Kanji from Late Edo to Early Meiji Period in Japan and its Impact on Modern Vietnamese"
by PHAM Hoang Hung, University of Social Sciences and Humanities (USSH), Vietnam National University (VNU)-Hanoi, Vietnam
- 7 Mar.: Open Seminar "Japanese-Language as a bond: Japanese Language and Japanese Communities in Abroad" hosted by No.23310176 Scientific Research(B), <KAKENHI>, co-hosted by Sociolinguistics Division, ICJS
by Satomi Takano KITAHARA, Rio de Janeiro State University, Brazil; Hidenori MASHIKO, Chukyo University, Japan
- 8 Mar.: Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 12th Research Seminar hosted by the Contrastive Japanese Division, ICJS
by Ryunosuke KURODA, Slavist, Freelance Language Expert; Naotoshi KUROSAWA, Hiroki NOMOTO, Tufs, Japan
- 18 Mar.: Research Seminar "Japanese in the Bible - the History of Translation" co-hosted by Comparative Japanese Culture Div. and International Cooperation Div. ICJS
by Norihisa SUZUKI, Emeritus Professor, Rikkyo University, Japan
- 13 Apr.: Workshop "Comparative Studies of Imperial Expansion in Iberia and Asia" hosted by Comité de Eventos de la Tufs para el IV Centenario de las Relaciones entre España y Japón, International Center for Japanese Studies
by Jean-Frédéric Schaub, École des Hautes Études en Sciences Sociales-EHESS, France

■ Meetings ■

- Center meetings: 2014 - 6 Mar., 10 Apr., 15 May.
- Division meetings: 2013 - 24; 30 Apr., 8 May.

■今後の活動予定■

- 7月29日(火)-8月1日(金) 10:00 ~ 国際日本研究センター主催 夏季セミナー 2014 「言語・文学・社会 - 国際日本研究の試み」
趙華敏氏(北京大学)、徐一平氏(北京外国語大学)、金鍾徳氏(韓国外国語大学)、任榮哲氏(韓国中央大学)、范淑文氏(国立台湾大学)、于乃明氏(国立政治大学)、蕭幸君氏(台湾東海大学)、タサニー・メーターピスィット氏(タマサート大学)、リム・ベン・チュエ氏(シンガポール国立大学)、村尾誠一氏、早津恵美子氏、高垣敏博氏、谷和明氏、野本京子氏、谷口龍子氏(東京外国語大学)
- 7月30・31日(水-木) 14:20 ~ 国際日本研究センター主催 「サマースクール院生研究発表会」
北京大学、北京外国語大学、韓国外国語大学、韓国中央大学、国立台湾大学、国立政治大学、台湾東海大学、タマサート大学、シンガポール国立大学、筑波大学、東京学芸大学、国際基督教大学、東京外国語大学 より院生約50名が発表

■ Future Events ■

- Tue. 29 Jul-Fri. 1 Aug.(10:00-) Summer Seminar 2014 "Language, Literature, Society: Approach to a Construction of International Japanese Studies"
by ZHAO Hua Min, Peking University; XU Yi Ping, Beijing Foreign Studies University; YU Nai Ming, National Chengchi University; FAN Shu Wen, Taiwan University; HSIAO Hsing Chun, Tunghai University; KIM Jong Duck, Hankuk University of Foreign Studies; YIM Young Chol, Chung-Ang University; Tasanee METHAPISIT, Thammasat University; LIM Beng Choo, National University of Singapore, Seiichi MURAO, Emiko HAYATSU, Toshihiro TAKAGAKI, Kazuaki TANI, Kyoko NOMOTO, Ryuko TANIGUCHI, Tokyo University for Foreign Studies, JAPAN
- Wed. 30-31 Jul. (14:20-) Summer School 2014 "Postgraduate Students' Workshop in Japanese Studies"
by approx. 50 students from Peking University, Beijing Foreign Studies University, National Chengchi University, Taiwan University, Chun, Tunghai University, Hankuk University of Foreign Studies, Chung-Ang University, Thammasat University, National University of Singapore, Tsukuba University, Tokyo Gakugei University, International Christian University, Tokyo University for Foreign Studies

ジャーナル『日本語・日本学研究』論文公募のお知らせ

Call for papers "Journal for Japanese Studies"

- 日本の文化・社会・歴史並びに日本語・日本語教育に関する研究論文(20ページ程度、400字×60枚)、海外の研究動向・研究潮流の紹介(20ページ程度)、研究ノート(10ページ程度)、書評(1ページ)
- 原稿の書式: 寄稿・投稿論文は日英いずれかの言語とする。日本語論文には、英語の概要(300語程度)、英語論文には日本語の概要(800字程度)をつける。
- 投稿エントリーとエントリー締め切り: 論文の投稿を希望する場合は、指定の期日までに、下記編集委員会アドレスにEメールで投稿予定の旨を連絡すること。メール本文には、氏名・論文の題名(仮題でもよい)・所属機関名(該当者のみ)、および連絡先(住所・電話番号・メールアドレス)を明記すること。また、メールのSubject(件名)には『日本語・日本学研究』投稿希望と記入すること。
- 大学院生が投稿する場合は、必ず指導教員の承諾を事前に得ること。
- 公開、複製、公衆送信に関する権利: 掲載された論文等の公開、複製、公衆送信の権利は、本センターに帰属する。本誌に発表されたものを転載する場合は、その旨を編集委員会に連絡して承認を得るとともに、当該論文等の初出を明示すること。また、掲載された論文等は本センターのHP上で公開される。

Submission Requirements of the Journal

Topics: Research article on Japanese culture, society, history, language, and language education (double space, approx. 20 pages,) international research trends (approx.20 pages,) research report (approx. 10 pages,) book review (1 page.)

Format: The articles may be written in Japanese or English. For articles in Japanese, attach a summary in English (approx. 300 words,) and for articles in English, attach a summary in Japanese (approx. 800 letters.)

For Entry: send e-mail application by the deadline below. Write "To apply the Journal for Japanese Studies" on the subject of the e-mail, also state the name, title of the article, name of the university, contact e-mail, home address, as well as the telephone number on the contents of the e-mail. (for PhD students entry, the authorization by his/hers doctoral course adviser/professor must be required)

Policy Acknowledgement: All rights relating to the publication, reproduction, and public transmission of the articles published on the journal shall belong to the International Center for Japanese Studies. Any contents shall not be reproduced without showing the credit, first appearance of the article, nor the express written permission given by the editorial committee. In addition, the articles of the journal will be published online at <http://www.tufs.ac.jp/common/icjs/en/>.

【指定期日】 投稿希望連絡締め切り 2014年7月18日必着
投稿論文締め切り 2014年9月末日必着

【連絡先】 東京外国語大学 国際日本研究センター
『日本語・日本学研究』編集委員会
〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1
電話/FAX: 042-330-5794 E-mail: icjs-editorial@tufs.ac.jp
URL: <http://www.tufs.ac.jp/common/icjs>

【Deadlines】 Deadline for Journal entry is July 18th, 2014
Deadline for Submission is September 30th, 2014

【For further information, please contact】

International Japanese Studies Editorial Committee,
International Center for Japanese Studies, Tokyo
University of Foreign Studies

【Address】 3-11-1, Asahi-cho Fuchu-shi, Tokyo 183-8534 Japan
Telephone and Fax: +81 (0) 42-330-5794
E-mail: icjs-editorial@tufs.ac.jp
URL: <http://www.tufs.ac.jp/common/icjs/>